

偶然の出会い 手話が結ぶ心

病院職員 竹中 敏晃

(滋賀県甲賀市 29)

いらっしやいませ。私は耳が不自由です。ご用件はメモに書いてください——。太田辰郎さんが静岡県で開くサーフショップの机にはそんなメモがある。「珈琲とエンピツ」は、訪れる客を自慢のコーヒーでもてなし鉛筆で筆談・接客する太田さんが主人公のドキュメンタリー映画だ。

5月26日。手話サークルの仲間と、その映画を見に大阪に出かけた。上映前、映画館近くの喫茶店に入ると、隣席の方々が手話をされていた。映画のサイン会に来阪された太田さんとお仲間だった。

「初めまして 私たちは……手話を……勉強していま

す」。思わず駆け寄り、手話で話しかけた。「私たちは……手話サークルの……仲間です」「滋賀県から……この映画を……見にきました」。知っている限りの手話で懸命に表現した。彼らはにこやかに読みとってくれた。

上映後のサイン会では、こう伝えた。「難しい……手話は……まだまだ……分かりませんが……太田さんの……気持ちちは……伝わりました」。学び始めて1年。私のつたない手話に、太田さんは嬉しそうに頷いてくれた。

もっともっと手話で伝えた気持ちがあったのに。もどかしさと偶然の出会いの嬉しさが入り交じる。ますます、手話を学びたいと思った。